

謀の遺体から発見されたと推定される。そこに引用された「四方の海皆はらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ」(日露戦時の「御製」)は“The four seas (...) will know no high wave, nor wind”となっていて、惜しくも原詩の嘆きを伝えない。だがこの翻訳は、爆撃に晒された地下壕の摂氏50度を越える焦熱地獄でなされたはずだ。司令官の遺書は何を訴えようとしていたのか。

平川祐弘著『米国大統領への手紙』(新潮社)は、予科練の育ての親でもあったこの石丸司令官の人物と閱歴を説く。玉砕の将ゆえにその死を美化しようというのではない。「わりきれぬ心を抱き支那大陸の空を飛びつつ」と日米開戦の直後に歌った軍人歌人の行動を介して、回避しがたい状況のなかでの倫理的な選択が、情理を尽くして問い直される。「御製」に拒否反応を起こし、「遺言」を忌避して言及を「自粛」する向きもあろう。だが思想信条の違いを越えて読み継がれるべき貴重な「紙碑」がここにある。日米の、そしてアジアの若い学生たちの思索や、賛否にわたる討議の糧として、是非ともまずその英訳の成ることを期待したい(本稿は前回承前)。

連載②

ある海軍司令官の遺言

歴史教育論争から距離をおいて

稲賀繁美

三重大学・フランス文学

硫黄島記念碑も、とかく「日本人」が集団的思考回避に陥るトポスのひとつだろう。日米双方合わせて2万6千におよぶ戦死者の出たこの激戦について、最近の「日本」の子供たちは何も知らず、関心も示さない、という。その硫黄島では1985年2月19日に日米合同で慰霊祭が催された。最年少参加者であったマイケル・ジャコビー少年は、かつての敵味方の遺族が和解したその現場の感動をレーガン大統領あての手紙に綴る。それが国際ロータリークラブのコンテストに入賞して、やがて日本の高校生向けの英語教科書に採用された(桐原書店)。当日の記録は『ニューヨーク・タイムズ』はじめ多くの米紙が一面でカヴァーした。だが、政府首脳代理の参加もなかった日本での扱いは、ごく目立たないものに過ぎなかった、という。

硫黄島の守備隊が玉砕して4ヵ月を経過した1945年7月11日、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』には「死に臨んだ日本の一提督の米大統領宛の手紙」が公表された。その「ルーズヴェルトニ与フル書」は守備隊の海軍航空戦隊司令、市丸利之助少将(当時)の執筆になり、英訳はハワイ育ちの三上弘文兵曹。手紙は村上治重通信参